英語教育とジェンダー

―― 中学校の教科書を中心に ――

伊　藤　明　美

I　はじめに

個人の尊厳を基礎とし、自由かつ自立した人間の形成を促すことは、あらゆる教育の基本的理念である。しかし、男女平等の視点から現在の学校教育というものを見渡せば、必ずしも理想通りに教育が行われているとは言い難く、女子児童・生徒が女性という性に対して肯定的な価値観を形成していくためには、多くの改革が今なお必要であるように思われる。高等教育になるに従って少なくなる女性教員数、圧倒多数を占める校長、教頭などの男性役職者、男女で偏りのある進路指導や就職指導、教師間、学校間で落差のある男女混合名簿の採用、さらに教科書における男女差別など、発達途上にある女子児童・生徒を取り巻く環境は、必ずしも女子が男子と「平等」に「自由」で「自立」した将来像を描くことができるようになっていない。特に教科書については、それが子どもたちにとって最も身近で日常的な教材であるため、これまでも個別的、体系的に決して少なくはない調査・研究が行われてきている。それらによれば旧来の「女らしさ」、「男らしさ」のステレオタイプを安易に受け入れ、固定的な性別役割分担を強化するなど、「女性差別撤廃条約」（日本は1985年に批准）の主旨に反するような教科書が今だに出版され、使用されている。しかし、義務教育期の教科書における性役割像や男女平等について、体系的で網羅的な調査を行った日本弁護士連合会「女性の権利委員会」の大脇雅子等は、以下のように述べ、教科書が与える子どもたちへの影響の重大さを指摘している。

> 子どもたちにとって教科書は、もっとも日常的で影響力の大きいメディアである。学校という子どもたちに対する一種

の権威のもとで、教科書は反復して使用され、試験というフィルターを通して子どもたちの知識や思考に、程度の差こそあれ、絶対的価値として定着していくからである[1)]。

本稿では、以上のような女子児童・生徒を取り巻く教育的環境を前提に、現在の英語教育におけるジェンダー問題の一面を、考察してみたい。前半では、フェミニズムによる英語の言語変革を象徴するものとしてMs.を取り上げ、日本における英語教育と教科書との関連で考察し、その後、教科書に見られるその他の記述や挿絵等における問題点の考察を試みる。なお、今回調査の対象とした教科書は、1998年度現在、北海道内の中学において最大のシェアを占める3社による3シリーズ、合計9冊である[2)]。

Ⅱ　社会の変化とMs.

1960年代以降のフェミニズムは、英語を性差別的な言語だとし、その後大きな言語変革をもたらした。接尾語、あるいは、人類全体としてのman、代名詞he／hisなどの使い方、Miss、Mrs.、Ms.の敬称については、現在に至るまで繰り返し論争を巻き起こしてきている。しかし、大変重要なことは、多くのmanことば（特に職業に関することば）が、新しいものへと変えられ[3)]、女性に対する敬称も郵便物、新聞等の表現をはじめMs.の使用頻度が著しく高まったことである。フェミニストたちにとってはまだまだ不満の残ることであろうが、英語における言語改革はこの40年の間に目覚ましい発展を遂げたと言う印象は強い。しかし、この言語フェミニズムの流れは、日本における英語教育に正当に反映されてきているのだろうか。1990年代に中学の教育を受けた現在の大学生たちは、さすがに、「人間」をmanと表すことは少なくなったが、多くは、everyoneをhe（あるいはhis）で受けることをごく自然にやってのけるし、相も変らずpolice-man、firemanであり、見知らぬ相手、特に組織などに対する手紙では、届く先の担当者が女性であるか否かなどを考えることすらしない。どこかの参考書から“Dear Sirs”を引っぱり出して、慣用句表現を一つ身につけ

たような顔をしている。

言語とは、社会の中にあって常に流動的であり、言語教育は言語をとりまく社会の動きや変化を無視することは到底できない。従って、現在のようなグローバルな社会にあっては、例えば、米国でアフリカ系アメリカ人がその呼び名をめぐって勝ち得た言語変化（negroがblackへ、そしてAfrican Americanへ）について、英語を母語としない国々での英語教育においても尊重されるべきであるのと同様に[4]、フェミニズムによる言語変革もまた、重要な学習項目としての位置づけが必要である。さらに、言語は使う人の価値観、倫理観の形成を助け、またそれらを表出するための手段でもあるが、暴力の定義には「ことばの暴力」が含まれることからも分かるように、言語教育にあっては、ことばの中に存在する「暴力性」というものを再認識することが必要であろう。ことばには内在する力というものがあり、それは社会との繋がりの中で、多くの場合は感情を伴って表面化する。今だに英語圏の国でbitchのロゴ入り製品を身につけたり[5]、いわゆる英語の4文字ことばを「ジョーク」として安易に発する学生などを見かけるが、これらの現象は日本における英語教育の「言語が持つ社会性」という側面に対する不誠意の表われであるとも言える。

Ms.については、*American Heritage*が1969年に改編を行い、いち早くこの敬称を採用している。1992年の第3版では、地域や社会状況によって従来からのMissやMrs.を好む人もいるとしながらも、以下のように説明されている。

> *Ms.* has come to be widely used in both professional and social contexts. Many women prefer it to *Miss* or *Mrs.* because they feel that information about their marital status properly belongs to the realm of private life and is often inappropriate to many of the contexts in which such titles are used. Many people also find *Ms.* convenient, since information about an addressee's

marital status is not always available[6].

フェミニストたちが提案したこのMs.という敬称は、今だにMr.と100%対等とは言えず、「解放された」女性のイメージを引きずることも確かだが、今日では広く受け入れられ、Ms.と呼びかけられて抵抗感を感じる女性は少なくなっている。*American Heritage*の説明からも分かるように、米国では公的な場面でもMs.が使われるほどになったが、この敬称の定着に一役買ったのが郵便である。ビジネスで郵便を多く利用する人々が未婚か既婚かわからない相手に対して失礼な呼びかけをしないようにとの配慮があった[7]。事実、筆者が英語圏から受け取る郵便物については、こちらの性別がはっきり相手に知られている場合、起首Dearに続く敬称は、ほぼ100%がMs.である（最近では学会関係の郵便もビジネス郵便も封筒や葉書の宛名については敬称を付すことすらしなくなりつつある）。また、近年における離婚率やシングル・マザーの増加など、女性のライフ・スタイルの変化もMs.の定着に拍車をかけた要因であろう。中・高年者や母親であってもMrs.ではない女性が増え、また、それは女性の社会的、経済的なエンパワーメントと無関係ではないことと相俟って、男性にとってもMs.は安全で便利な呼びかけとなったように思う。

そもそも、Miss／Mrs.が未婚／既婚を示すために使用されるようになったのは、産業革命後にそれまで比較的固定的だった地域間の人的移動が起るようになってからであり、19世紀初頭までは、Missは若い女性に、Mrs.は成人した女性に対して使われる敬称であったと言われてる。しかし、それまで暮らしていたコミュニティーから外へ、あるいは逆に他のコミュニティーから見知らぬ人々を受け入れていく過程で、それまでは聞くまでもなく知ることができた女性の未婚／既婚の別が分からなくなり、手取り早く女性に対して異なったラベル貼りをした。つまり、Miss／Mrs.は、恋愛や結婚の主導権を握っていた男性の便宜をはかるために考案された言語使用であり、男性に対してはこのような言語のラベル貼りがされなかったことからも、女性は男性の所有物の一つして広く社会が認めていた

こと、また言語は男性によって操作されてきた極めて政治的な存在であるという側面が理解できる。

19世紀後半になると女性たちはさらに不可視的な存在になり、例えばMr. John Smithと結婚した女性が、時にはMrs. John Smithとまで呼ばれるようになったが、この習慣は、現在でも根強く残っており、決して完全に消滅したわけではない。スペンダーは、女性たちがこのような習慣を継続させてきたのは、家父長制イデオロギーの成功を裏付けており、そのような社会の中で女性が選びとることのできるアイデンティティがいかなるものであるかを物語ると言い、それは、現代女性の男女観に深く影響を及ぼしていると述べた[8]。

Ⅲ　英語教育とMs.

家父長的社会が長く続いている日本でも、表札や各種書類への記名が男性名をもって妻をも表すという習慣が残っていたり、貧しかった時代の反動からか「奥様（さん）」ということばが一種のブームを経て、日常語の中に定着している。女性に対しては高齢者であっても「おばあちゃん」と呼ぶのは大変失礼で、「奥さん」と呼ぶべきだという笑えぬ発言[9]には、家父長的社会の中で無意識に形成された女性の意識が露呈する。このような発言は、発言者が気付かないままに結婚しない女性を疎外し、ある程度の年齢を過ぎれば、女性は結婚し「妻」であるのが当り前という意識が隠されている。Ms.という敬称がこれまでの英語学習者の中で簡単には定着してこなかった背景には、このような社会認識の影響もあったことであろう。女性は結婚すれば夫の姓を名乗り、「ご主人」、「奥さん」と呼び合う大人に囲まれて育てば、フェミニストたちが個としての尊厳やアイデンティティを求めて提案したMs.は、若い学習者にとってはどこか実感のわかない敬称である。事実、大学生を対象にした筆者の調査でも、Ms.の意味や使用方法を知らないのではないかと思われる学生の数は、決して少なくはない。

平成10年度前期に行ったこの調査では、男女合わせて204人（女子学生156人－内40人は英語専門の学生、男子学生48人）の大学１、２年生に対して、年代が明らかに違って見える女性２人と家族連れの女性、及びできるだけ無意識に敬称を付けてもらえるようにと男性１人を混在させたプリントを配布し、あらかじめ用意してあった４つの姓(Takei, Mc'donald, Morey, Smith）からそれぞれの人物に適当だと思われるものを選択させ、敬称をつけて書いてもらった。その結果、Ms.の存在を知らないと思われる学生（Ms.を３人の女性のうち誰にも使用しなかった者）は、203人中（無効１）88人（43.3%）であった。また、家族連れの女性についてのMs.使用は176人中（無効28）57人（32.4%）になり逆にMrs.が113人（64.2%）となった。さらに、単独で写っている２人の女性のうち少なくとも１人についてはMs.を使用しているにもかわらず、家族連れの女性に対してMrs.を使った者は、115人中38人（33%）であり、Ms.を知っている者であっても、３人に１人は夫や子どもがいればあえてMrs.を使っていることが分かる。

一方、産業界はさすがに反応が早く、資生堂は、1980年代になるとMs.という名の商品を発売している。その時期、賠償美津子という役者をモデルに使ったMs.のポスターが日本中で見られたが、結局は大衆の意識も英語教師の意識も部分的に動いただけで、Ms.の定着に大きく貢献することはできなかった。終戦後、外国語と言えば英語を指す程、実質的には外国語教育の殆どを英語教師が担い、そこでは常に言語と文化の不可分性が声高に叫ばれてきたはずである。その教師たちが、英語文化の半分を担う女性周辺の社会変化に伴う言語の変化に対して、はたして肯定的な反応をしてきたのかどうかには疑問付がつく。前述の英語辞書の改編から30年後の現在、６年間の英語教育を終えた大学生の約半分はMs.を使えない（あるいは知らない)、男性や子どもがそばにいれば自動的にMrs.を付すなどのナイーブさは、世界的なフェミニズムの流れに無頓着であった英語教育の産物と言わざるを得ない。

Ⅳ　教科書の中のMs.

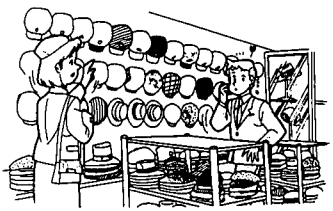
次に、女性の敬称が教科書ではどのように扱われているかについて、検討していくことにする。

A社のシリーズでは、*Book 2*のLet's Enjoyのセクションで、Ms. Watt and Mr. Knottという会話文のタイトル中に初めてMs.を出しているが、*Book 1*～*3*を通してMs.が出てくるのはここだけである。しかもMs.はタイトルに出てくるだけで、会話におけるそれぞれの発話の冒頭には敬称が付されていない上、話の中味がダジャレのようなことば遊びであるためノーマルな会話文と比較すると読みにくく、この意味でも生徒のMs.に対する関心は払われにくい設定になっている。従って教師自身がこの敬称についての丁寧な説明を加えない限り、見過ごされてしまう危険性は極めて高い。

一方、Mrs.は*Book 1*でMrs. Adamsが主要登場人物と会話をするシーンで初登場し、それ以降、first nameで呼ばれる若い登場人物を除き、女性に対しては、すべてMrs.という敬称が付されており、不自然な印象を与える。例えば、*Book 2*では買い物客のMrs. House、日本語の教師としてMrs. Suzuki、さらに主要登場人物の一人、Jimの母親としてMrs. Adamsが登場する。最後に挙げたMrs. Adams以外は（母親であるからといって必ずしもMrs.であるとは限らないとも言えるが、その可能性は低くはないので）、あえてMrs.にする必要性は全く感じられない。当然のことながら、女性登場人物の幾人かはMissであっても良いはずなのだが、こちらの方はシリーズを通して一切使用されておらず、結果として「大人の女性」は結婚しているもの（すべきもの）の考え方を強く押し出す形になっている。さらに、以下の会話では、膨大なファミリー・ネームの選択肢の中からHouseという姓を抽出し、あえて女性の買い物客に与えるなどの無神経さが見られる。houseということばが女性、既婚、買い物などと共に使われる時に与える一般的な印象は、これまで女性を家の中に囲いこんできた家父長的社会の問題と必然的に種々重なっていくことは避けることはできない。意図的であろうとなかろうと、このようなこと

ばの使い方は、活字のサブリミナルと言うことができる。

Mrs. House: Excuse me.
Mr. Day: Yes?
Mrs. House: I want that cap.
Mr. Day: That blue one?
Mrs. House: No, that red one.
Mr. Day: O.K.
Here you are.
Mrs. House: This is too small.
Mr. Day: How about this one?
Mrs. House: This is good. How much is it?
Mr. Day: I don't know. I don't work here.



A社 *Book 1*: p.59

B社のシリーズでは、*Book 1*でMiss、Mrs.、Ms.、の全てが紹介され、Ms.の使用方法については、巻末資料8 Words and Phrasesの中で、以下のように比較的丁寧な説明をつけている。

◉結婚しているかどうかでMissかMrs.かが決まります。男性には常にMr.を使うので、それにならって、女性にはMs.[miz]を使うことが多くなってきています。

B社 *Book 1*: p.104

しかしながら、ここでもMrs.は全て登場人物の母親という設定になっており、「母親イコール妻」式の日本型女性観が見られる。自らの選択による事実婚カップルや離婚によるひとり親家庭の増加などを踏まえ、古典的な結婚観、女性観に基づいた女性像を押し付けるのではなく、多様な生き方、あるいは多様な家庭の在り方を認めていく姿勢も大事なのではないかと思われる。

一方、C社のシリーズでは*Book 1*から積極的にMs.を導入しており、むしろ、女性についてはMs.以外の敬称は避けているのが特徴である。教科書に登場する人物は、教師を除き、全て中学生と同世代の人物に絞っているため、例えば*Book 1*で登場する「大人の女性」はMs. GreenとMs. Brownの2人だけという状況である。巻末資料でもMr.とMs.のみが簡潔に紹介され、MissとMrs.はシリーズを通して全く紹介されていない。それでも、ストーリー構成に違和感は全く感じられないし、MissやMrs.が出てこないことによる弊害もないように思われる。あえて問題点を追及するなら、まだ、MissやMrs.は死語ではないと言うことであろう。しかしその問題にしてもB社の巻末資料にあるような簡単な説明があれば充分に対応が可能であると思われる。

V　教科書におけるその他の問題

次に、それぞれの教科書における記述や挿絵、その他の内容について少し述べてみたい。

まずは、A社のシリーズだが、こちらは男女の固定的役割分担をはっきり表した会話や挿絵が多く見られた。例えば、誕生日パーティで、花瓶に花を活ける母とグラスをテーブルに運ぶ娘（*Book 1*: p.72)、配膳する母と座って待つ家族(*Book 1*: pp.74～75)、料理する3人の女性(*Book 2*: pp.26～27)、衣類乾燥機の使い方を説明する母（*Book 2*: p.30)、塩をとってもらう父とそれをわたす母(*Book 2*: p.36)、送別会で接待する母(*Book 2*: p.80)、料理、洗濯、裁縫をする祖母（*Book 3*: pp.42～43）など、教科書で扱われる家事のほとんどを母や女子の登場人物にさせている。若干の工夫がみられるのは、最初に挙げた*Book 1*のp.72で、母はYukiという女子にグラスを、Jimという男子にケーキを持ってくるように依頼し、男子にも“All right”と答えさせていることであろう。しかし、挿絵では女子にグラスを運ばせているだけで、男子が家事に関わる可能性を感じさせる会話の工夫が充分活かされてはいない（以下参照)。

Jim: What time is it?

Mrs. Adams: It's five thirty.

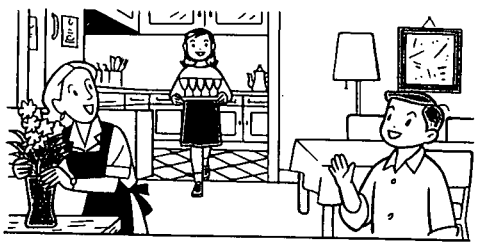
Jim: Is the birthday cake ready?

Mrs. Adams: Yes, it is. Go to the kitchen and bring the cake.

Jim: All right.

Mrs. Adams: Yuki, take the glasses to the table.

A社 *Book 1*: p. 72



また、直接家事を行っていない場面においても旧態依然とした男女の固定的なイメージが描かれる箇所がある。例えば、「台所」で「食べ物」の話しをする女子と母などはその代表格と言える（以下参照)。

Yuki: I like beef.

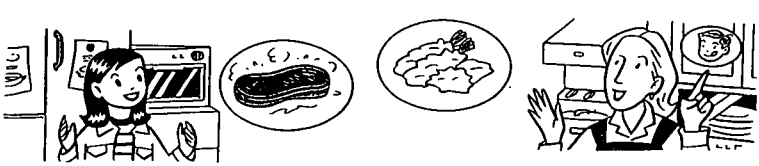
Mrs. Adams: Good. Jim likes Japanese food.

Yuki: Does he like *sushi*?

Mrs. Adams: Yes, he does. He likes *tempura*, too. We often make *tempura*. Does your mother like beef?

Yuki: No, she doesn't.

Book 1: pp. 46〜47



この会話は、Lesson 7「ジムの家庭」の一部である。Lesson 7 − 1からLesson 7 − 3で構成されるこの課においては、7 − 1でJimがAki（Yukiの妹）に自分の部屋を紹介した後、7 − 2では居間に移り、父の趣味としてクリケットの話しをしている。ここまでは、JimとAkiの会話であり、全体的な話しの流れと付随する挿絵からは、JimがAkiに家の中を紹介しているような印象を受ける。従って、7 − 3で場所が台所に移されたとたんにJimが消え、変りに母親が登場するのは何か唐突で強引な感すらある。さらに、その会話内容もその場にはいないJimの嗜好についての描写が5文（“We often make *tempura*.” を、前文からの流れで「ジムが好きだから」と考える）を占め、母親がJimの代弁をするという形だ。しかも、その場にいるYukiの嗜好については本人がたった一言、“I like beef.”と冒頭に言うのみであり、Jimの母親に至っては自分のことについては一切述べていない。このような会話を作成し、記載した背景には、教科書作成者側の固定的役割分業観の強い規範に基づいた「食事を作る女性（母親・女子）と食べる男性」、あるいは、「男子厨房に入らず」といった考え方があるように思われる。

さらに練習問題では、「娘」に部屋の「掃除」をさせる「母」、「父」にギターを「ねだる娘」の記述（*Book 3*: p.29）があり、「男は仕事、女は家庭」の価値観が再度表出する。男女に割り当てられた職業も、男性が校長、宇宙飛行士（この場合、会話の相手も男子）、列車の車掌、入国審査官等で、女性は相変わらずデパートの案内係や飛行機の客室乗務員、教師である。現在、女性が様々な分野へ進出しているという現状にそぐわないばかりでなく、向上心旺盛かつ職業的にさらなる広がりを求める多くの女子生徒たちの夢を反映していない。

『国民生活白書』によると、すでに1988年にはサラリーマン世帯の妻の働く割合が半数を超え、1995年では20歳から59歳までの女性の労働力率が64.4%になっていると言うのに、「家事を引き受けるつもりはない」男性が51.1%おり、1995年の男性の平日家事時間は26分で、過去25年間全

く変っていない[10]。従って教科書に見られる上記のような記述や挿絵は、日本の現状の一部を端的に表したものだと言えなくもない。しかし、重要なことはこのような男女観に基づいた家庭や社会の在り方そのものこそ、世界から変革を求められているのだということ、また、本来自由に描くことが可能なはずの女子の夢や希望に、古典的な「良妻賢母」像など一定の枠組みを押し付けて、結局は彼女たちの夢を奪っているのだという認識を深めることである。若い男女は変ったと言われながらも、その実、日本女性の就業パターンは、今だに先進国では珍しいM字曲線を描き、その就労形態はパートタイマー雇用が多い。出産後に仕事を辞し、子どもの成長を見守った後で再就職というこの形態が、広く日本の男女によって支持される背景には、表になり裏になりこのような価値観を培う教育があり、その教育を支える柱の一本は子どもたちが毎日使用する教科書であることを忘れてはならない。

また、「装い」についても女性の領域として扱われていることが目立つ。例えば、着用しているドレスで女性歌手を紹介するリポーター（*Book 3*: p.56)、食と衣の文化的相違について会話する女子（*Book 3*: p.26)、パーティーに着ていくものを相談する女子（*Book 3*: p.66）などである。最初に挙げた*Book 2*の人物描写については、男性２人、女性１人をTVのリポーターが描写する形になっているが、男性の場合は「世界で最も人気があり、日本でも大ヒットした映画」の俳優、または「プールに入ろうとしている」有名なディレクターとされ、その業績、あるいは行為で描かれている。しかし、１人しか登場しない女性については「赤のロング・ドレスを着た」人気歌手となる。

実は、この傾向は辞書や新聞など他の活字の世界においても同様である[11]。比較的最近の例を一つ挙げると、1998年の長野オリンピックで女子モーグルの頂点に立った里谷選手を、北海道新聞は「茶髪のシンデレラ」と称した[12]。さらにこの記事は年齢にもこだわりを見せ、中見出しは「21歳里谷世界の頂点に」、記事の中でも「…信じられないといった表情の21

歳にチームメートの上村愛子が抱きついた」と繰り返される。性質上、スポーツ記事の中で選手の年齢が紹介されのはよくあることだが、少なくとも'98年冬季オリンピックでは、里谷選手以外の金メダルを報じる記事の見出しに年齢が含まれていたものはない。例えば、ジャンプの船木選手の金メダルを報じた記事の見出しは、「船木　満点アーチ『金』」であり、記事の中でも「若きエース」とはあるが、年齢は記載されていない[13]。船木選手もまた、茶色に染めた髪や形を整えて剃った眉が目についたものだが、こちらについては新聞紙上で言及されることは一切なかった。里谷選手に使われた「茶髪」や「21歳」は、彼女の金メダルとは無関係であり、実際の業績から読み手の関心を容姿や年齢へとそらすものである。個人の優れた業績が、これら容姿に関わることばや、「シンデレラ」などの他力本願的な人物で表現されるのは女性だけであり、男女によってこのような使い分けをすることは是正されるべきものである。

また*Book 3*では、客の女性がバッテリー切れに気付かずにカメラの修理を男性店員に依頼する設定で会話が構成され、「機械に弱い」女性像が描かれる（*Book 3*: p.22)。店に出向いて店員の説明を受けるまで自分のカメラのバッテリー切れに気がつかない女性がどの程度いるのか知る由もないが、あえてこのような場面を設定する必要はない。仮に女性が客で男性がカメラ屋の店員という、この教科書通りの役割設定であっても、このセクションの主要な指導項目である“pardon?”を盛り込みつつ、性差別的ではない会話の作成は充分可能である。また、仮に女性がバッテリー切れに気付かない程「機械に弱い」というイメージを、教科書作成者グループの一部が持っていたとしても、そのようなステレオ・タイプを再生産するのではなく、逆に、今までの教育こそが女性の能力を一定の枠内に閉じ込めてきたことを認め、改革していく姿勢が強く求められる。

一方B社のシリーズでは、サイズも小さく目立たないものの、練習問題のページの中で掃除や料理をする男子(*Book 1*: p.20、79、*Book 2*: p.18、77、*Book 3*: p.10、11、26）などの挿絵が見られたり、また、目立つとこ

ろでは本文に添えられた挿絵でエプロン姿の男性（父か弟など家族のようにみえるが、挿絵からは判断は難しい）に料理の手伝いをさせ（*Book 1*: p.23)、少なくとも家事が男性と無関係であるような作り方はしていないように見受けられる。女子が水泳や釣をする挿絵と練習問題(*Book 3*: p.35)、剣道部で活躍する女子の記述とそれに伴った挿絵(*Book 2*: p.65)、さらに、日本女性のパイロット第一号となった西崎キクの物語を載せるなどジェンダー・フリー教育に対する配慮がところどころに見られる。しかし、内容を詳細に観察すると教科書の全体的な傾向としては、A社同様に「活動的で社会的な男性」、「受動的で家庭的な女性」というイメージは払拭し難く強い。

具体的には、女子の部屋を人形で埋めつくしたり（後方の壁⅓、及び右の壁全面に備え付けられた棚に人形が所せましと並ぶ－*Book 1*: p.45)、マラソンをする男子と応援の女子(*Book 2*: p. 6)の対照が見られたり、男子のみが走る徒競争(*Book 2*: p.51)が練習問題で描かれていたりする。また、*Book 1*のProgram 8 (pp.48～51)ではサイクリングとクリケットが得意で活動的な印象の男子と、自宅で映画観賞をするのが好きで語学が達者な女子という対照が冒頭から大きく見開きで描かれる(以下参照)。

(*Book 1* Program 8 － 1 : pp.48～49)

一方、遅刻をしたり（*Book 1*: p.91、*Book 3*：❹）、勉強をしない（*Book 1*: p.59、61）、そのためノートを借りる（*Book 1*: p.92）、宿題を忘れる（*Book 3*: p.44）などの設定で登場するのは男子のみである。一見男子に対して差別的にもみえるこれらの描写は、例えば、英語の勉強が嫌いでも、彼はやさしいスポーツマンで、女子生徒の憧れであり、当の英語教師すら彼の帰国を残念がる（*Book 1*: pp.59～61）ような描き方をしており、「不真面目」というよりは「愛すべきやんちゃな男子」というイメージを与えている。女子は男子に勉強を教え、ノートを"Sure."と喜んで貸すような真面目な人徳者として描かれているが、シリーズ中メインで登場する2人の医師は男性であるし（*Book 2*: p. 8 －挿絵、*Book 3*: pp.36～41）、登場する歴史上の人物や長文などの中で業績と共に人物が描かれる場合は、圧倒的に男性が多く18人中16人までが男性である[14]。従って、全体的に見ると上記のような男子の行為は、彼等のイメージをおとしめるどころか、むしろ「社会を担う」のは「自由でのびのびと成長する男子」というメッセージすら与えている。

また、会話以外で4ページ以上の長文（実話、説明文等）はシリーズ全体を通して12話あるが、男性中心で描かれるものが10話と圧倒多数を占め、ここでも数的なアンバランスが生じている。さらにそれらの中には、「賢者」ソロモン王の話がシバの女王との絡みで出てくるが（*Book 3*: pp.52～56）、その賢者ぶりは、対局に据えられたシバの女王との対照で浮き彫りにされ、短いこの話からは、女王は嫉妬深く、また愚劣な行為を繰り返す人物としか写らない。具体的には、王の人気ぶりを妬む女王がソロモン王をやりこめようと連日もくろむが（"Be careful of the Queen Sheba, King!" ... "She's jealous of you because you're loved by the people." ... During the next few days, the Queen tried hard to show that King Solomon was not really wise... "So far, we haven't succeeded, and tommorow will be our last chance....Why don't we make a fool of him before a great number of people?"...)、すべて失敗。ソロモン王

はかつて助けたミツバチによって助けられ、自省し、その賢者ぶりをますます高めていくというものだ。

これまで述べてきたように、この教科書には多くのジェンダー・アンバランスが生じているが、そのような中でこの話を読まされる生徒たちは、女性という性に対していったいどのような意識を形成していくことだろう。学校における全ての教科教育とは、それぞれの教科における知識や技能の習得だけではなく、指導を通じて人間形成をもねらいとするものである。日本では、英語教育をEnglish Teaching/Learningではなく、English Educationと位置付けているのもそのためだ。このような観点からも、男女の別なく各々の生徒が家庭や社会の中で肯定的な自己像を形成していけるような教科書作りの視点が必要であり、このような構成の物語の採用には注意を要する。

さらに、問題点としてもう一つ見逃すことができないのは、そのタイトル"The Wisest Man in the World"である。ここで意味するmanは、あいまいである。タイトルから読み手が最初に想起するのは「男」であるが、一旦内容に入り込むと、タイトル中のmanは、「人間」であるということを認識する。なぜならこの場合のworldは万民（当然女性を含む）の世界を指し、ソロモン王は世界中の全ての人々の中で最も賢いとされていることが理解できるからだ。男女（雄雌）混合のグループの中で、比較最上級を用いて表現される人物や動物については、通常男女の別を示す表記は必要ではない。「最も早く飛ぶ鳥」であって「最も早く飛ぶ雌鳥」ではないし、「たてがみの最も美しい馬」であって、「たてがみの最も美しい雄馬」ではない。

現在、性差別的だとして最も良く知られているのは、「he/man言語」と呼ばれているもので、それは、manやheを無指定に使用したり、manやmankindを人間全体を指すのに使用することに対する問題提起である。スペンダーは、総称としてのmanは、15世紀まで事実上使われた形跡がないことをつきとめた上で、それは、ガービーが定式化した「文法規則88

箇条」(1746年)の中で、男性形は女性形よりも包括的と述べられたことで決定的になったとし、19世紀以降における規範文法によるhe/manの法制化は、計画的な政策の結果であり、男性優位の考え方を推進するために意識的に目論まれたとして、強く批判している[15]。

前述のように、物語のタイトルで使われるmanは、この場合「人間」を意味し、規範文法に則った考え方をすると、このmanは、女性でも男性でも良いことになる。しかし、仮に物語りの中の役割を逆転させて、シバの女王が「最も賢い人」であった場合にmanが使われると、読み手の脳裏では、ただちに、manと女王とのイメージ衝突が起るのである。manは女性を含むと言い、"Man makes wars."(人は戦争を行う)という文章が、それが一般に人口の約半分にしか適応しないことを認めながらも、イメージの衝突を感じないで言うことができるのに、"Man devotes more than forty hours a week to housework"などの文章では衝突が起きるというのは、manの意味が事実上男性であり、男性イメージを喚起させるからである[16]。*American Heritage (Third Ed.)*では、manは含みによっては女性を指すこともあるとしつつも、countableに使用されるmanは、personやpeopleとして置き換え可能であり、その方がより明瞭であるとしている。また、人類あるいは人間全体を表すmanについてもほとんどの場合humanityやhuman kindに置き換えることができるとしている。

英語に限らず外国語学習は、特に一定のレベルに到達するまでは、学習の多くを暗記に頼らなければならない時期がある。中学の英語学習は、学習活動の多くを暗記が占めることは否めず、将来どこかで間違いが指摘されたとしても、「化石化」によって実際上は訂正が困難になる場合もある。「he/man言語」のように、結果こそ出ていないものの長い間にわたって議論が続き、*American Heritage*や*O.E.D.*などでもそのあいまい性を指摘するようなことばに関しては、できる限り、より明確だとされる形に置き換えておくのが無難であろう。

卑近な例だが、米国滞在中に、男女混合のグループに対してguysと呼

んだり、呼ばれたりする習慣をどこかでは不思議だと思いながらも、これが極めて日常的な言語使用であることから、女性である自分自身もまたこのことばを自らの言語体系の中に組み込んでいったことを忘れることはできない。guysの対局にあるのはgalsであるが、これらの言葉は、事実上、価値的な不平等が生じており、混合グループをgalsと呼ぶことなどは、よほど条件が揃わない限りあり得ない。女性を不可視にするこのことばの裏に隠れている政治的な意味に気付き、その使用を止めるのは留学生活も後半になってからのことである。

人間の持つ世界観が違うのは、言語のせいだとサピア＝ウォーフの仮説は言う。つまり、言語は概念を導き、形作るものである。日本語の例では、「売春」ということばが、長い期間にわたってその根源的な問題であるところの買う性を概ね不可視にしたまま、売る性だけに問題点を押し付けていったように、言語は中立などではなく、また概念を伝える媒体としてだけの役割を持つものでもない。この観点からも教科書で使用されることばについては、細心の注意が必要であり、不必要な性差別的言語の採用やあいまいなことばは回避するべきである。状況的にどうしても必要な場合には、丁寧な説明を付けるなどの配慮をするべきであろう。

最後になったが、C社のシリーズについては、男女平等の視点が教科書のいたる場面でかいま見える。例えば登場人物のカップルの一組は共に職業を持ち、妻、夫ともに科学者という設定であったり、出張する母と家事をする父などが登場する。さらに教室の掃除をする男子、皿洗いをする父、ケーキを焼く男子、食事の用意をする父、サッカーをする女子、道を教える女子などが登場し、従来の性別役割分担にこだわらない男女像があちこちに見られ、それらは堂々とカラーの挿絵であったり、複数ページにまたがる会話などになっている。また、差別的な職業語がどのように変化したかについても*Book 3*の最終頁で分かりやすく呈示されている（以下参照）。あえて問題点として指摘するならば、「買い物好き」女性のステレオタイプ（*Book 2*: pp.54～55）が１ヵ所見られる程度である。

chairman→chair(person)
"Who was the chairperson?"
「議長はだれだったの。」
"Paula was."「ポーラよ。」

「議長」は男性だけ?

こんにち，女性が男性と同じように社会で活躍するようになってきましたが，これまでは，英語でも職業や仕事を表す言葉には，男性中心の言い方が多くありました。そこで，そうした言葉を，両方の性に同じように使える言葉に変えることが行なわれています。ここに示したのはそのような例の一部です。

mailman→mail carrier
The mail carrier hasn't come yet.
郵便屋さんはまだ来ていない。

（*Book 2* 最終頁一部抜粋）

以上、3シリーズ、9冊の教科書を検討してきた。どれも文部省の検定済教科書であることに変りはないが、男女平等の視点からは、それぞれの内容に大きな偏りのあることが分かる。英語という言語そのものの指導項目に大差はなくても、記述の仕方や挿絵などについては教科書間で相当バラツキがある。性差別的な描写は、一見「隠されて」はいるがカリキュラムの一部であることに変りはなく、中学における3年間を通して利用する教科書であればこそ、作成者側が意図しようがしまいが、生徒たちの価値観形成に大きく影響を及ぼすものである。また、3シリーズとも世界の連帯・協力・共生などのメッセージを明確に表し、アフリカ、アジア、南米などの途上国を積極的に取り上げ、それらの国々と日本及び日本人との肯定的な関わりについて触れており、それ自体は大いに評価できることである。しかし、一方ではこのような崇高な理想を掲げ、他方では女性を家庭の中に囲いこみ、将来への夢を纏足させるような記述を堂々と容認するダブル・スタンダードな考え方に基づいた教科書作成の在り方は問題である。男女平等思想の根幹は「平等な人権の享受」にあり、それは、世界の国々との連携や共存とは同一線上にあることを、再認識する必要があるのではないだろうか。

Ⅵ　おわりに

地球規模的に人が動く現代の英語教育にあっては、社会の動きに伴う言語変化について敏感である必要がある。繰り返しになるが、bicthなどのロゴ入り製品を身につけて英語圏に出かけるような、無神経な学習者を育ててはならないのである。この意味においても、教科書では、英語圏の女性が今どのような意識の下に、どのような言語改革を行い、社会がどのように変化しているのかについて、教師たちが知り、また、その指導に活かしていけるような配慮が充分必要になってくるものと思われる。

最後に、日本が1985年に批准した女性差別撤廃条約の根幹のひとつは、旧来の性別による固定的な役割分担の解消であり、また、1975年のメキシコ以後、コペンハーゲン、ナイロビ、北京と続いた世界女性会議においても、女子の教育に関しては、そのカリキュラム、教材の見直しが毎回のように求められてきていることを強調したい。このような国際的動向を踏まえ、現状を無批判に受け入れて古典的なステレオタイプの再生産をするのではなく、男女平等の視点から積極的で誠実な教科書作りと継続的点検が必要であり、また、差別的な表現に出会った時は修正した上で指導する、あるいは出版元に助言をするなど、より適切な教科書作りの過程に、多くの人が積極的に関わっていく姿勢が大切であると考える。

（注）

1）伊東良徳，大脇雅子，紙子達子，吉岡睦子『教科書の中の男女差別』明石書店，1991，p.214.

2）北海道教科書供給所によると，A社は1年生34701名，2年生35483名，3年生41966名，B社は1年生11721名，2年生12468名，3年生15887名，C社は1年生18870名，2年生18368名，3年生が10546名によって使用されている．採択地域は，上川，留萌，宗谷，十勝，網走支庁と札幌市，旭川市，岩見沢市，石狩支庁（3年生のみ）がA社を，渡島，後志，空知，胆振，日高支庁と小樽市，室蘭市，釧路市（3年生のみ）がB社を，また，桧山，釧路，根室支庁と函館市，帯広市，苫小牧市，釧路市（1，

2年生のみ)，石狩市（1，2年生のみ）がC社を採択している.

3）fire fighter, chair, astronaut等.

4）「黒人」が，African Americanと呼ばれるように変ったことを教えられてこなかった大学生は多い.

5）昨年の夏にbitchのデイパックを背負った日本人男性を米国で見かけて唖然としたが，このブランド製品はかつて社会的議論を巻き起こしたことや，このことばが英語母語話者の女性たちにとってどのような意味を持つものか，また決してジョークにはなりえないなどということを，この男性は理解していないに違いない.

6）*The American Heritage of English Dictionary (Third Edition)* Houghton Mifflin Company, 1992.

7）フランシーヌ・フランク，フランク・アンシェン『英語にみる性とことば』関西大学出版部, 1995, p.146.

8）スペンダー・デール，れいのるず＝秋葉かつえ訳『ことばは男が支配する　言語と性差』勁草書房1994, pp.46～48.

9）「おばあちゃんと軽く呼ばないで」『北海道新聞』1996年11月27日付朝刊, 16版，6面. この他にも「おばあちゃん」ではなく「お宅」と呼ぶのが無難だの投稿（『北海道新聞』1998. 4. 23付朝刊)等がある.

10）経済企画庁『平成9年度版　国民生活白書』大蔵省印刷局，1997.

11）田中和子「新聞に見る構造化された性差別表現」，遠藤織枝「日本語研究」，れいのるず＝秋葉かつえ編『おんなと日本語』有信堂高文社，1993.

12）塚田博「茶髪のシンデレラ」『北海道新聞』1998年2月12日付朝刊, 16版, 1面.

13）「船木満点アーチ『金』」『北海道新聞』1998年2月15日付夕刊, 6版, 1面.

14）男性は，サッカー選手のペレ，砂漠緑化に貢献した向後元彦，ローレンツ，松尾芭蕉，海外医療協力会の川原医師，Michael Jackson, Lionel Richie, Stevie Wonder, Quincy Jones, Harry Belafonte, パスカル，マイクロプロセッサーを開発した嶋正利，徳川家康，イギリス国王ジェームス一世, 三浦安針, ゴッホなど. 女性では西崎キク(Book 1 : pp.48～49、向井千秋（Book 3 :pp.45～48）の2人のみである.

15）スペンダー・デイル，前掲書，pp.252～258.

16）同上書，pp.268～271.

参考文献

本文（注）で挙げたもの以外に：

・カメロン・デボラ，中村桃子訳『フェミニズムと言語理論』勁草書房，1990.
・キトレッジ・チェリー『日本語は女をどう表現してきたか』ベネッセ・コーポレーション，1995.
・コーツ・ジェニファー，吉田正治訳『女と男とことば』研究社出版，1990.
・塩見鮮一郎『言語と差別』新泉社，1990.
・スミス・フリップ・M，井上和子，河野武，正宗美根子訳『言語・性・社会』大修館書店，1987.
・ニコルソン・ジョン，村上恭子訳『男は女より頭がいいか』BLUE-BACKS，1995.
・中村桃子『ことばとフェミニズム』勁草書房，1995.
・メディアの中の性差別を考える会，上野千鶴子編『きっと変えられる性差別語』三省堂，1996.
・メディアの中の性差別を考える会『メディアに描かれる女性像』桂書房，1991.
・安川寿之輔『女性差別はなぜ存続するのか』明石書店，1996.

資料